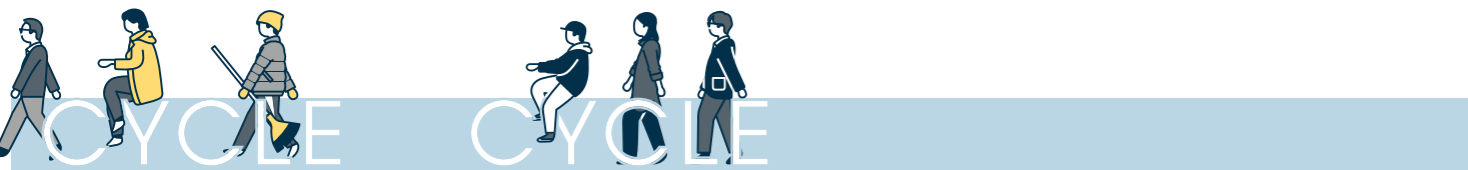


競輪とオートレースの補助事業



競輪とオートレースは、
日本中のファンに
愛されるプロスポーツです。

速さだけでは勝てない「頭脳戦」。

競輪



ブレーキのない自転車で、バンクと呼ばれるすり鉢状のコースを周回して順位を争う競技。先頭は台風並みの風力を受けるため、レース序盤は選手の風よけとして誘導員が走ります。スピードに加え、周りの選手がいつどう出るかを考えながらの掛け引きも面白いところ。レース終盤は一気に追い込み、ドラマティックな展開に。エンターテインメントスポーツとして、ファンを魅了しています。



時速 150km の「超接近戦」。

オートレース



8台のバイクで、内周500mのだ円形のオーバルコースを6周して順位を争う競技。使うマシンは、ブレーキやメーターなどを削ぎ落とした、ハンドルの高さが左右で異なる専用のバイク。抜きつ抜かれつの超接近戦で、男女の区別なく同じレースを走ります。10mきざみのスタートラインを設け、選手の実力によって距離に差をつける「ハンデレース」で、最後まで目が離せないレースを楽しめます。



CONTENTS

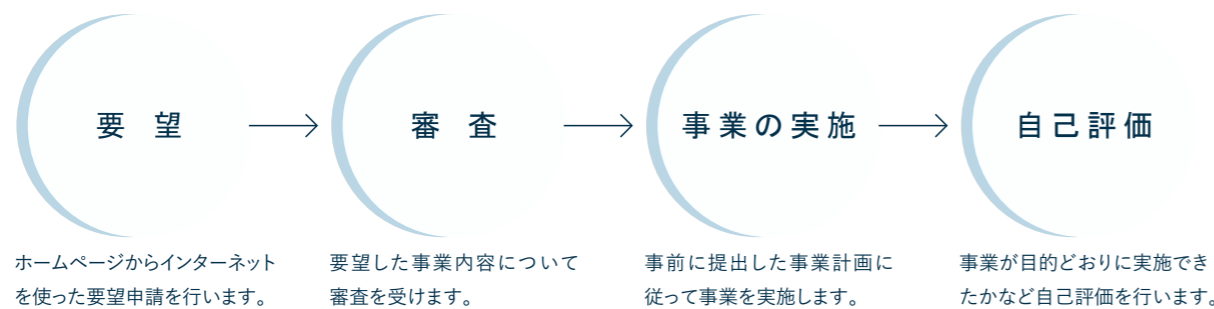
- 4 競輪とオートレースの補助事業概要
- 5 競輪とオートレースの補助事業の流れ

補助事業紹介

- 6 公益事業振興 | スポーツ・パラスポーツ | 東京都
「年に一度の全国大会」がもたらすものは？ — 一般社団法人 日本車いすバスケットボール連盟(JWBF)
COLUMN① 非常災害の援護 活動支援や物資整備を通じて「復旧・復興」を支援
- 8 公益事業振興 | 地域共生型社会支援事業 | 大阪府
社会を変える「デザイン」とは？ — NPO法人 DeepPeople
COLUMN② 公設試、医療機器 ものづくり・新産業・治療法の発展へ貢献
- 10 機械振興 | 研究補助 | 岩手県
「食べる」の安心を測る、とろみ計測器とは？ — 岩手医科大学 黒瀬雅之教授・齊藤桂子助教
COLUMN③ 機械技術を活用した福祉機器の振興 医療・介護・福祉をより快適で豊かに
- 12 公益事業振興 | 障がい児・者 | 広島県
誰もが安心して働くには？ — 社会福祉法人 まどか
COLUMN④ 障がい児・者 誰もが自分らしく生きられる社会をつくる
- 14 機械振興 | 公設工業試験研究所等 | 大阪府
「ものづくりのパートナー」になるには？ — 地方独立行政法人 大阪産業技術研究所
COLUMN⑤ 建築 安全・安心な社会づくりを建築から支える
- 16 COLUMN⑥ 福祉車両 幸せに暮らせる地域社会を創る移動支援
検診車 誰一人取り残さない福祉と健康に寄与
- 17 2023年度 機械振興補助事業・公益事業振興補助事業一覧表

競輪とオートレースは
社会に役立つ活動を応援します。

競輪とオートレースの補助事業



ホームページからインターネットを使った要望申請を行います。 要望した事業内容について審査を受けます。 事前に提出した事業計画に従って事業を実施します。 事業が目的どおりに実施できたかなど自己評価を行います。

<http://hojo.keirin-autorace.or.jp/>

※補助事業の選定については、外部委員から構成される補助事業審査・評価委員会において慎重に審査した上で決定しています。

ひとりひとりの想いから、感動のドラマが生まれる。

社会を変えるプロジェクトをWebで続々公開中!

Webサイト「CYCLE JKA Social Action」では、社会課題の解決に取り組むさまざまなプロジェクトについて、詳しく紹介しています。

補助事業の申請についても、Webで確認できます。



アクセスはこちらから

<https://www.jka-cycle.jp/>



競輪とオートレースは、売上の一部を用いて、
ものづくり、スポーツ、地域振興等
社会に役立つ活動を応援しています。

機械振興補助事業

振興事業補助

- 自転車・モーターサイクル・障がい者スポーツ
- 安全・安心、生活の質の向上、防災・減災
- 機械技術を活用した福祉機器の振興
 - 福祉機器の整備
- 国際競争力強化に資する標準化の推進
 - ものづくり支援
 - 地域の機械産業の振興
- 省エネルギー等の環境分野の振興
 - 医療機器の振興
 - 医療機器の整備
- 2025年日本国際博覧会への支援

公設工業試験研究所等

- 機械設備拡充
- 人材育成等
- 共同研究

研究補助

緊急的な対応を必要とする事業への支援

公益事業振興補助事業

公益の増進

- 自転車・モーターサイクル
- スポーツ(障がい者スポーツを含む)
 - 社会環境
 - 国際交流
 - 医療・公衆衛生
 - 文教・学術文化
- 新世紀未来創造プロジェクト

社会福祉の増進

- 児童
- 高齢者
- 障がい児・者
- 地域共生型社会支援事業
- 幸せに暮らせる社会を創るための活動や車両・機器等の整備

復興支援

研究補助

緊急的な対応を必要とする事業への支援

<http://hojo.keirin-autorace.or.jp/>

※この冊子でご紹介する事業は一例です。その他の事例を含め詳しい情報は、競輪とオートレースの補助事業のホームページに掲載しております。ぜひご覧ください。

※上記プロジェクトの概要は変更になる場合があります。

自分が生きたい人生を生きる

女子車いすバスケの競
技人口は65人。男子の5
10人と比べてずっと少
ない(2022年4月1日
時点)。パラスポーツの選
択肢の広がりや新型コロナ
ウイルスの影響などで、
地方都市では存続が難し
いクラブも出てきている。

ただ、追い風もある。東京パラリンピックでの選手たちの活躍だ。競輪とオートレースの補助事業が開催を支援しているこの大会は、女子選手の育成や競技力強化を主な目的として開催されている。女子の全国大会は唯一。「継続的な開催が日本代表の活躍にもつながった」と大会を運営するJWBF会長の玉川敏彦さんは振り返る。「選手には毎年開催される皇后杯が刺激になっている。東京パラリンピックで6位入賞できたのも、30年以上やってきた成果です」

決勝の後半。カクテルのガード柳本あまね選手がパスワークでゲームをつくる。北田選手や網本麻里選手らが攻勢をしかけ、点差を一気に広げた。Wingもエースの椎名香菜子選手を中心に巻き返しを図るが、固い守りを破れず58-37でカクテルが快勝。7連覇を成し遂げた。

勝敗もさることながら、参加した選手にとっては、この大会が、それぞれの1年間の歩みを確認する大切な機会にもなっている。試合後、北田選手は「車いすバスケは自分の居場所。新型コロナウイルスの感染拡大で練習や大会が思うように



カクテルの北田千尋選手



Wingの原田恵選手(右)。コロナ禍で2年半ぶりに練習を再開できた



車いすバスケのルールは、一般的なバスケとほぼ同じ。障がいの度合いで選手に持ち点があるのが大きな違い

COLUMN 1 | 非常災害の援護

活動支援や物資整備を通じて「復旧・復興」を支援

頻発する自然災害に対しては、少しでも早い復旧・復興のため、現地団体の支援や日本赤十字社を通じた救援・救助物資整備を行っています。2023年5月の能登地方を震源とする地震では救援物資を配布。同年6、7月に発生した大雨でも、富山、山口、福岡、佐賀、大分5県の被災地域に対し、救援物資を配布しました。これからも、被害に遭われた方々の復旧・復興のために適切な支援を迅速に行っていきます。



できない中、その思いを一層強くした」と語っていた。

「車いすバスケの世界では、障がいがあっても、なくても、みなお互いを理解し、リスペクトしている。何も隠すことなく、一番こうありたいという自分でいられます」

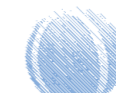
JWBF常務理事の橘香織さんは言う。

「自分が好きなスポーツで自分の人生を豊かにできる。車いすバスケを通して、学び、自信をつけて、その先の人生を輝かせていく。今活躍している選手たちがロールモデルとなって、後に続く人たちに、夢を見せてあげてほしい」

年に一度の全国大会はこれからも続く。誰もが、自分が生きたい人生を生きられる——そんな未来を目指して。

一般社団法人
日本車いすバスケットボール連盟
(JWBF)

「年に一度の全国大会」
がもたらすものは？



目標は勝ち
続けること

2022年8月、女子車いすバスケットボールのクラブチーム日本一を決める大会が神戸市内で開催された。皇后杯第31回日本女子車いすバスケットボール選手権大会。参加するのは、6チーム、50人の選手たち。コロナ禍で2度の中止を挟んだ久しぶりの全国大会だ。

大会2日目。決勝のコートには、白いユニフォームの「Wing」(関東ブロック)と史上初の大会7連覇を目指す「カクテル」(関西ブロック)の選手たち。両チームとも、日本代表選手が顔を揃える強豪だ。

初日から華麗なプレーで会場を魅了していたのが、カクテルのパワーフォワード、北田千尋選手。東京パラリンピック日本代表で、日本代表のキャプテンを務めている。

「この大会が日々の練習の目標」と北田さんは語る。末梢神経の障がい19歳から車いすに乗った。子どものころから好きだったバスケ。「選手は諦めて、コーチになろう」と進んだ大学時代、インターシップ先に選んだ障がい者スポーツセンターで車いすバスケと出会った。「もう一度、選手になれる」と始めた競技だ。

「もう、とことんやってやろう、と。カクテルの目標は、この皇后杯で勝ち続けること。そこに向かうと、チームの士気が上がります」

とは難しい。その間を取り持つ中間支援団体はなくてはならない存在だと思います」

DeepPeopleは、環境問題や障がい者就労、貧困状態にある子ども自立支援、留学生支援などさまざまな社会課題を解決するソーシャルビジネスに取り組んでいる。始まりは2007年、デザインでもある牧さんが受け持っていた大学のゼミで、デザインで社会課題を解決する商品開発に学生たちと取り組んだことだった。

近年力を入れているのが次世代の育成だ。中心となるのが、2017年設立のフリースクール「未来価値創造大学校」。中でも「アドベンチャーコース」と名付けた授業は毎週1回90分、スタッフらとの対話を重ねながら、自ら設定した課題の解決を目指す。

コースに通う中学1年生の平井恒成さんはスマホアプリ「みんなで町をきれいにしよう。Love town」を考案した。まちのいいところを知ったり、地域につながりがあったりすれば、まちを愛し、ゴミを捨てなくなるかもしれないと考え、アプリを作ることにしたという。恒成さんはこのアイデアを「関西SDGsユースアクション」で発表。2021年度の小学生の部で優秀賞を受けた。翌年度はまちの魅力や環境問題を考えるボードゲーム「Love townスローク」を開発。兵庫県川西市内の百貨店のイベントな

次世代育てる未来価値創造大学校

とは難しい。その間を取り持つ中間支援団体はなくてはならない存在だと思います」

とは難しい。その間を取り持つ中間支援団体はなくてはならない存在だと思います」



スタッフと打ち合わせをする中尾榛奈さん



フードスマイリングで食材を届けた淡路子ども食堂には大勢の人々が詰めかけていた



自分のプロジェクトの資料を作る平井恒成さん(手前)

COLUMN 2 | 公設試、医療機器

ものづくり・新産業・治療法の発展に貢献

地域ニーズに応じたものづくり、新産業の創出、省エネルギーの推進や環境問題への対応など社会的課題を解決するために、機器の購入を補助しています。各都道府県の公設工業試験研究所（公設試）に対しては、ものづくり、新産業の創出、産業の高付加価値化につながる事業や産業人材の育成、地元企業や大学などの連携を支援しています。医療機器の振興に資する事業も行っており、新たな治療法を生み出す基盤整備を支えています。



NPO法人 DeepPeople

社会を変える「デザイン」とは？



「つなぐデザイン」コロナ禍で発揮

「全てのものはデザインされている」——。NPO法人DeepPeopleの理事長、牧文彦さんは言う。モノだけではなく、社会の仕組みもそうだ。だからこそ、DeepPeopleは社会の課題に対し、解決方法をデザインしてきた。コロナ禍では「フードスマイリング」で、困難にある食の生産者と子ども食堂、子どもたちをつないだ。

「フードスマイリングは生産者と子ども食堂をつなぎ、笑顔の輪を広げていく事業です」とDeepPeopleのプロジェクトディレクター、中尾榛奈さんは言う。その「デザイン」はこうだ。

コロナ禍で食料を得ることが難しくなった家庭があった一方、外食産業などへの影響で食料が余る生産者が増えた。地域の子どもの食堂を通じて両者をつなぐ農林水産省の事業をDeepPeopleが受託。さらに、この時できたつながりを生かし、競輪とオートレースの補助事業を受けて始めたのがフードスマイリングだった。2022年度は58食堂に計116回食材を送り、提供を受けた子どもたちは4657人ももった。稲刈り体験などの食育事業も実施してきた。

大阪市内にある淡路子ども食堂を主催する蔭山力雄さんは「食堂の運営にとって中間支援団体の存在は不可欠」と言う。

「全国展開する団体のほうが食料の量は集まりますが、個別の子ども食堂に物資を届けるこ

「介護は、在宅で生活の質を高めようという流れ...」

「課題は防水と耐久性を上げること。あと、もう少し小さくしたい。食事の際にちょっと測って、安心して使えるものにしたいです」

「実際の用途が立てば、次は実際に使ってみてもう段階に入る。齊藤さんはこう話す。」

「介護は、在宅で生活の質を高めようという流

一緒に食卓を囲める未来を目指す

「ようやくここまで来ました」

「黒瀬さんはそう言っていて、右手に持った「とろみ計測器」を見せてくれた。3Dプリンタで出力した半透明の樹脂製。長さ15cmほどの筒状の内部には、

「オールで水をかくと、水の抵抗が手に伝わりますよね。この『抵抗』を検出すれば、『粘度』を明らかにできると考えました」

「センサーの位置、棒の形、動かし方、速度など要素の最適な組み合わせを探した。その結果、高精度の粘度計と比較しても、実用に十分な精度を出せるようになった。今回の研究では、齊藤さん、黒瀬さんそれぞれが競輪とオートレースの補助事業の支援を受けたことで、開発を進めることができたという。黒瀬さんは言う。」



開発中のとろみ計測器。大幅な小型化に成功した



黒瀬雅之さんの専門は病態生理学



齊藤桂子さんは小児歯科の医師でもある

COLUMN 3 機械技術を活用した福祉機器の振興

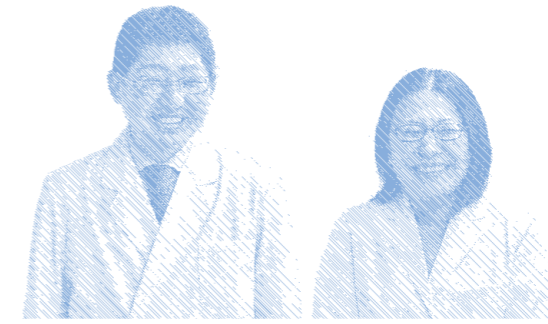
医療・介護・福祉をより快適で豊かに

機械技術・機械工学を活用した福祉機器の導入を支援しています。医療・介護・福祉サービスの適正化・効率化を図るとともに、全ての人が快適に利用し、幸せで豊かな生活を送ることに役立てられています。また、施設利用者の安心・安全と介助者の身体的負担の軽減、利便性向上のため、リハビリ機器、特殊浴槽、見守り支援システム、介護ロボット（移乗介助、移動支援）、その他介護機器（介護リフト、座面昇降機能付車いす、モジュール型車いすなど）の導入支援を行っています。



岩手医科大学 黒瀬雅之教授・齊藤桂子助教

「食べる」の安心を測る、とろみ計測器とは？



介護現場で「とろみ」が課題に

在宅介護が広がる中で「とろみ」が課題となっている。歳を重ねたり障がいがあったりすると、飲み込む力が弱くなる。のどを通りやすくするため「とろみ」を付けるのだが、その加減は実は感覚頼りとなっている。そんな中、岩手医科大学の研究者たちが連携し、とろみを手軽に測れる装置の特許を取得した。目指すのは、誰もが安心して食卓を囲める社会だ。

「実際の現場でとろみを計測している人はほぼいません」と話すのは、同大歯学部教授の小林琢也さん。とろみは数値化が難しく、とろみ剤を使う時は「ハチミツくらい」「とろとろ・さらさら」など感覚的な表現が使われてきた。さらに、液体の温度でもとろみは変わり、その人の状態によって必要な粘度も違う。一方で、とろみが薄くて気管にもが入り肺炎になった事例や、とろみが濃すぎてのどに残り炎症を起こした事例もあるという。

こうした課題の解決を目指すのが、今回の研究だ。きっかけは、障がいのある子どもの歯科医療に携わってきた同大附属病院の歯科医師で助教の齊藤桂子さんのある問い掛けだった。

障がいのある子どもの発達支援のためにとろみ剤を使うが、粘度計は高価で、大きい。そこで、計測に詳しい同僚の歯学部教授、黒瀬雅之さんに「家庭用のとろみを測る機械を知りません」

「安全」のためではない。

「子どもの介護の現場では、親は子どもの食事の世話をし、その後食べる人が多いです。手軽に使える機器があれば、食事の準備の手間を減らせて、食事の時間を共有できる。一緒に食事が進むこともあるんです」

「一緒に食べる」。そんな日々の幸せを、妨げる壁がいくつもある。一人では難しくても、つながればできることはある。連携から始まった研究が実を結ぶのは、もう少し先の未来だ。

「精神障がいがある方の働きにくさは、見た目だけでは分かりにくいことにある」と話すのはすみれ工房の管理者、高橋恒二郎さん。

「周囲の小さな変化に大きな不安を感じたり、逆に、自分の気持ちを伝えることにすぐ臆病になっていく方もいる。だから、変化は気づいてもらえる、伝えても大丈夫、と少しずつ伝ええます。安心して過ごせる環境が働ける力につながるからです」

2022年には競輪とオートレースの補助事業の支援を受け、就労支援のための施設を新築した。とまり木と同じ施設で行っていたすみれ工房の活動が独立でき、落ち着いた環境での個別相談もできるようになった。

近年力を入れるのが「就労定着支援」。就職後、就労移行支援事業での6ヵ月間の支援が終わった後、3年間の支援を続ける仕組みだ。例えば、ある利用者から、「周囲からの声掛けが減った」という不安の声を聞いて動いたことがあった。周囲に聞いてみたところ、「任せられるようになったから、声掛けの必要が少なくなった」ことが背景にあった。働く人と企業との間に入り、すれ違っていた気持ちをつないだ。信頼関係のある職員が支えたことで、もう一度、安心して仕事に取り組みめるようになったという。

高橋さんは言う。

力を入れる「就労定着支援」

「精神障がいがある方の働きにくさは、見た目だけでは分かりにくいことにある」と話すのはすみれ工房の管理者、高橋恒二郎さん。



新設した個室の相談室で相談に応じる高橋恒二郎さん



補助事業の支援を受け新築したすみれ工房



2004年ごろのすみれ工房

(COLUMN 4 | 障がい児・者)

誰もが自分らしく生きられる社会をつくる

障がいのある人の社会参加や自立を支援する活動、その家族を支援する活動など、障がいのある人が地域で幸せに暮らせるために日々取り組む活動を支援しています。車いすテニスの国際大会を35年以上続けている飯塚国際車いすテニス大会や、誰もが音楽を楽しめるように20年以上にわたって福祉コンサートを開催している名古屋フィルハーモニー交響楽団などを支援しています。



誰もが安心して働くには？

社会福祉法人まどか



地域で暮らす居場所と仕事をつくる

2022年のクリスマスイブの日の朝、「すみれ工房」に通う人々は広島県福山市の立体駐車場にいた。この清掃がこの日の仕事だ。工房に通い始めたきっかけはさまざま。外に出る、誰かと話す、一緒に働く……。そんな社会での日常は、ときにとっても難しい。社会福祉法人まどかはそのような人たちの居場所と仕事をつくり、地域で暮らす支援を続けている。

(福)まどかの事業は三つある。一つ目は、地域交流や創作活動の場の提供、相談受付などを行う地域活動支援センター「とまり木」の運営。二つ目が「すみれ工房」での就労継続支援事業。冒頭の清掃のような作業を通して生活のリズムを整え、就職へ向けた取り組みを支援する。そして、三つ目が訓練や活動を通して、一般企業への就職を目指す就労移行支援事業だ。

利用者の一人、新納佑介さん(仮名)は27歳でうつになり、実家で10年間、ほとんど寝たきりの生活を送っていた。あるとき「相談できる場所」で検索し、ヒットした保健所の相談窓口で案内されたのが「とまり木」だった。

日々の一部をとまり木で過ごすようになり、1年前からすみれ工房で働き始めた。新納さんは「この人たちは言葉にせんでも、表情や態度で感じ取って声を掛けてくれる。『普通の社会』で生きていた時にはなかったことです」と話す。

「ここに来る人たちは、自分の考え、しんどさを否定されて挫折を味わってきた。でも、伝えても大丈夫、分かってもらえたら働けることをここで確認してもらいたいです」

誰もが一人では立てない時がある。支えがあれば、立てることもある。向き合えば、分かることがある。伝えられることもある。(福)まどかがつくるのは、そんな「当たり前」を確かめられる場所だ。

「ものづくり企業の
ベストパートナー」
として

大阪産業技術研究所は、年間7万件の技術相談を受ける西日本最大の公設試験だ。和泉センターで経営企画を担当する、法人経営本部 兼 和泉センター 企画部長の松永崇さんは「大阪府内は、さまざま

な業種が活動しているので、対応できる技術分

「自社で解決できないことでも、ここに来れば解決できる。スペシャリストに丁寧に教えていただき、『意外とできるかも』と思えてくる。同じ研究者として、技術者のモチベーションアップにもつながり、研究が加速していきます」

頼りにしているのは、高精度の分析力はもちろん、技術者の育成にまで「一歩踏み込む」支援のかたちだ。協働の中から新製品も生まれている。

「自社で解決できないことでも、ここに来れば解決できる。スペシャリストに丁寧に教えていただき、『意外とできるかも』と思えてくる。同じ研究者として、技術者のモチベーションアップにもつながり、研究が加速していきます」

サラヤで商品開発を担うバイオケミカル研究所で、手指環境衛生グループのグループ長を務める松村玲子さんが言う。

無添加の洗剤や消毒液などを手がけ、事業を国内外で広げてきた。原材料は、植物由来のものがほとんど。品質管理が難しい分、性能を客観的に裏づけることが重要になる。

ただ、中小企業が自社だけで、スペシャリストを育てることは難しい。分析に必要な機器も次々と最新のものが開発され、自前でそろえることも現実的ではない。そこで頼りになるのが、公設試験だという。



中央にある化粧品「ラクトフェリン ラボ」に使われる天然の界面活性剤は協働の中で開発された



実習に参加するサラヤ バイオケミカル研究所 係長の飯田一希さん



森之宮センターで開催された質量分析の研修。機械の説明をする大橋博之さん

COLUMN 5 | 建 築

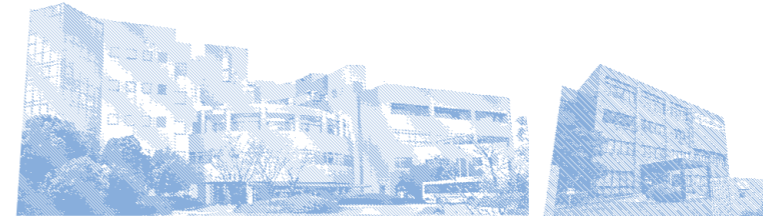
安全・安心な社会づくりを建築から支える

安全・安心な社会づくりを目指す活動や地域社会の安全・安心に資する活動を支援する中で、必要な施設の建築や補修事業も行っています。刑務所から出所後の社会復帰を支援している更生保護施設の新設や、聴覚障がいのある子どもたちの学校の補修事業なども支援しています。



地方独立行政法人
大阪産業技術研究所

「ものづくりのパートナー」
になるには？



全国から技術者が集まる研修

ためだ。

講師は、同センター環境技術研究部の研究員・大橋博之さん。質量分析とは、さまざまな物質を原子・分子レベルで測定し、組成や量を突き止める方法。原材料の成分分析、不良品の原因解明、新しい性能の発見など、幅広い産業分野で応用できる。

今回の研修は、競輪とオートレースの補助事業で企画されたもの。質量分析装置も補助事業で導入されたものだ。

集まった技術者の中に、ヤシノミ洗剤や洗濯石鹸、消毒液など、衛生・環境・健康に関する製品で知られるサラヤで商品開発を担当する飯田一希さんがいた。受託研究員として同センターで研究開発を行いながら、技術指導も受けているという。

「科学技術は日々大きく進歩しています。我々のような中小企業が、それを全て把握することはハードルが高い。こうした研修を受けられることは非常にありがたいです」

サラヤの創業は1952年。環境負荷の少なさ、安全性の高さを追究し、合成香料や着色料が

2022年3月、大阪産業技術研究所森之宮センターにある実験室に、

さまざまな企業で研究開発に関わる技術者5名が全国から集まった。同センターに導入された、質量分析装置の研修を受け

機械振興補助事業一覧表		2023年4月1日現在(単位:千円)	
事業区分	対象事業	採択	
		件数	金額
振興事業補助	自転車競技に関する機材の開発・改良・調査・研究	5	222,642
	自転車・モーターサイクル(社会づくり、安全・安心)	2	28,391
	自転車・モーターサイクル(IOT化の促進)	0	0
	障がい者スポーツ	0	0
	安全・安心、生活の質の向上	8	170,987
	防災・減災に資する取組み	0	0
	福祉機器の振興	0	0
	福祉機器の整備	143	702,732
	国際競争力強化に資する標準化の推進	10	79,967
	公設工業試験研究所(機械設備拡充)	51	1,258,338
	公設工業試験研究所(人材育成等)	4	4,971
	公設工業試験研究所(共同研究)	3	7,134
	ものづくり支援	9	30,895
	地域の機械産業の振興	1	9,457
	省エネルギー等の環境	1	5,036
	医療機器の振興	3	44,337
	2025年日本国際博覧会	2	299,894
	感染症に関する事業	2	18,179
	計	244	2,882,960
	研究補助	個別研究	80
若手研究		29	56,277
開発研究		14	196,527
ステップアップ研究		9	87,580
複数年研究		53	512,024
計		185	1,248,339
合計	429	4,131,299	

公益事業振興補助事業一覧表		採択	
事業区分	対象事業	件数	金額
		公益の増進	自転車(競技力向上等)
自転車・モーターサイクル	44		789,707
スポーツ・パラスポーツ	16		350,515
社会環境	10		251,210
国際交流	6		72,539
医療・公衆衛生	20		502,198
文教・社会環境	16		132,002
新世紀未来創造プロジェクト	8		7,943
計	122		2,285,339
社会福祉の増進	児童		9
	高齢者	0	0
	障がい者	22	353,169
	地域共生型社会支援事業	8	41,530
	幸せに暮らせる社会を創るための活動や車両・機器等の整備	211	598,271
	計	250	1,094,385
	復興支援	6	14,043
研究補助	11	31,463	
非常災害の援護※		100,000	
緊急的な対応を必要とする事業への支援※			
合計	389	3,425,230	

※予算枠であることを表す。合計に予算枠は含めない。

福祉車両
幸せに暮らせる地域
社会を創る移動支援

地域の福祉環境向上を目指し、施設利用者の送迎などに使われる福祉車両の購入を支援しています。幸せに暮らせる社会を創るための恒常的な支援だけでなく、大雨などで被災した地域における緊急支援や、新型コロナウイルスの感染拡大などの社会情勢に応じた追加支援も実施。地球環境への配慮などの観点から、HV(ハイブリッド自動車)やコンパクトカーの福祉車両整備も積極的に支援して

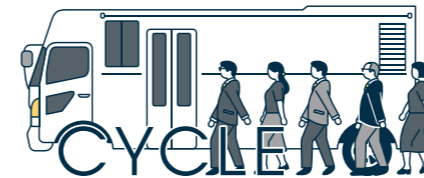
います。2023年度は188件(3億8104万5000円)を助成しました。地方において公共交通機関の減少・サービス水準の低下などが社会問題となっていることに加え、移動支援に対する需要はますます増えていくと考えており、福祉車両整備の支援に一層注力していきます。



訪問入浴車と分割浴槽



COLUMN 6 | 福祉車両・検診車



胸部X線撮影装置



検診車
誰一人取り残さない
福祉と健康に寄与

地域社会の医療環境の向上を目指し、医療機関の少ない地域や学校・職場の集団検診などで使用される検診車についても、整備の支援を積極的に進めています。検診車は、すべての人の福祉と健康の向上に向け、病気の早期発見と予防のために使用されています。

2023年度は19件(5億158万円)を助成しました。近年は、病院での受診や外出の機会が減っており、

健康を害する方が増えています。検診車の積極的な導入によって受診機会を増やすだけでなく、既存のX線デジタル検診車よりも撮影精度が高く、新型コロナウイルス対策に有効であるとされているCT検診車を補助対象とすることで、重症化の抑止やさらなる健康増進に寄与することを目指します。